

日本語の音声体系の可視化による発音と表記の同時導入

バックレイ^{フージャ}厚子¹⁾*

1) 東北大学 高度教養教育・学生支援機構（日本語非常勤講師）

0. はじめに

日本語の仮名文字は表音文字であり、仮名文字の習得が日本語の基本的な発音の習得に繋がる。日本語学習の初期段階における仮名導入の利点としては、仮名文字によって、日本語の音声の特質である「拍」を基本単位とする音声体系を効果的に学習できる点を挙げることができ、梶屋（1996）は、音声だけではかなりの聴覚訓練が必要な「拍」の指導に1字1拍を表す仮名文字の学習が有効であると述べている。

しかし、基礎的なコミュニケーションのための日本語習得を目指す短期間の初級コースでは、ローマ字表記のテキストを使用し、授業中の板書や配布資料も全てローマ字を使用することで仮名導入を省き、学習者の負担を軽減しようという案もある。

仮名導入の必要性は、プログラムの特徴やコースの目的、対象学習者のニーズなどに合わせて判断すべきであるが、ローマ字表記による日本語の発音への弊害を考慮し、学習者の生涯的な自律学習を奨励する観点から、日本語初学者への仮名と発音の同時導入をできる限り推奨すべきであると考える。

日本語の文章をローマ字表記した場合、例えば、「ほんをよむ」が /honoyomu/（ほのよむ）、「にほんへいく」が /nihoneiku/（にほねいく）、「かばんのなか」が /kabannonaka/（かばのなか）と発音されがちである。このような発音ミスは、仮名の導入を省いたローマ字表記による授業の受講者や仮名学習が進まずローマ字表記に頼る学習者に目立ち、日本語のローマ字表記に起因する発音ミスであると考えられる。母語干渉による発音ミスは学習者の母語により異なるが、上記のような発音の誤りは、仮名を省いたローマ字表記に

よる指導法が抱える問題点であり、学習者の仮名の修得の遅れが日本語の発音にも影響し兼ねないことを示唆する。

本稿は、日本語の音声体系の可視化による発音と表記の同時導入法を提案し、注意喚起すべき留意点を音声学的観点から考察する。

1. 日本語の音声体系の可視化

本稿が提案する発音と表記の同時導入法は、2014年2月にロンドンで開催されたヨーロッパ日本語教師会・国際交流基金ロンドン支部共催セミナー/ワークショップにおいて、川口義一教授（早稲田大学大学院日本語教育研究科）が実演された導入法をベースに筆者が考案したひらがな表とカタカナ表（以下、仮名表）による日本語の音声体系の可視化の試みである。

一般的な50音図は、仮名文字を音声体系に即して体系化し、清音を母音と子音に分類し、基本母音に基づいて仮名を縦横に並べ、子音が揃っている縦一列（カ行～ワ行）は母音の変化、母音が揃っている横一列（ア段～オ段）は子音の変化を示す。しかし、濁音、拗音、促音、長音などは含まれておらず、日本語の音声体系を総括的に示すには不十分である。そこで、本稿で提案する発音と表記の同時導入の実践に当たっては、濁音、拗音、促音及び、子音の異音化と母音の長音化を可視化する工夫を試み、独自の50音図を考案した¹⁾。

表1の作成に際しては、音素記号に即して発音すると実際の発音とは異なる異音（Allophonic Variations）に当たる仮名文字を網掛けすることで注意喚起を促す工夫を施した。

（半）濁音に関しては、カ・サ・タ行の濁音に使わ

*）連絡先：〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41 東北大学高度教養教育・学生支援機構 huja.backley.d7@tohoku.ac.jp

ひらがな											
/m/	/w/	/r/	/y/	/n/	/h/	/n/	/t/	/s/	/k/		
ん	わ	ら	や	ま	は	は	な	た	さ	か	あ
											い
や	ゆ	よ	り	み	ひ	に	ち	し	き	い	い
											う
			る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
											え
			れ	め	へ	へ	ね	て	せ	け	え
											お
			を	る	よ	も	ほ	の	と	そ	こ

*1 赤色表記
*2 青色表記
*3 紫色表記

/p/ /b/ /d/ /z/ /g/

表1 ひらがな表（付録1拡大図参照）

れる濁点「゛」と、ハ行の濁音と半濁音に付加される濁点「゜」と半濁点「ゑ」をそれぞれ挿入枠で囲んで追加した。更に、拗音でイ段の仮名に付加する小文字の「ゃ・ゅ・ょ」も挿入枠で追加した。

特殊モーラ（mora）²⁾ に関しては、促音を示す小文字の「っ」をタ行の「つ」に隣接表記し、撥音「ん」の異音を示す音素記号 /m/, /n/, /ŋ/ を挿入枠で追加表記した。

また、母音の長音化を示すため、ア行に「い」と「う」の隣接表記を追加し、それぞれ対応する音素記号の /e/ と /o/ と同色で示した。更に、助詞の「は」、「へ」、「を」の発音を示すため、ハ行に隣接表記の「は」と「へ」を加え、対応する音素記号 /w/, /e/, と同色で示し、「を」は /o/ と同色で示した。表1における色分けの対応関係は以下に示す通りである。

仮名	音素記号	色分け
ア行の隣接表記の「い」 ハ行の隣接表記の「へ」	/e/	赤色
ア行の隣接表記の「う」 ワ行の「を」	/o/	青色
ハ行の隣接表記の「は」	/w/	紫色

表1の仮名表開発の狙いは、日本語の音声体系を総括的に俯瞰し、発音と仮名表記の体系的な関係性を可視化することであり、仮名表で可視化された（半）濁音、拗音、異音、特殊モーラなどを意識化することで、学習者が犯しがちな発音や表記の誤りを予防/矯正しながら、日本語の単音、単語、単文の発音と仮名表記を同時導入することを目的としている。

仮名表を使って発音と表記を同時導入する手順としては、まず、画面に映し出した表1の仮名文字を基本母音から順に1文字ずつポインターで指しながら、5母音と清音を導入し、子音(Consonant) + 母音(Vowel)を基本単位とする日本語の音声体系の特徴を示す(2.1, 2.3参照)。次に、濁点の挿入枠を利用しながら濁音を導入し、清音の子音（無声子音）に対応する濁音の子音（有声子音）が、清音の仮名文字に濁点を付け加えるだけで簡単に表せる仮名文字の特徴を体系的に示す(2.2, 2.3参照)。更に、イ段の仮名に付加する小文字の「ゃ・ゅ・ょ」の挿入枠を利用して拗音を示し、特殊モーラ（mora）に関しては、単語に含まれる撥音、促音及び長音を挿入枠、隣接表記、色分け表記を利用しながら導入する(2.4参照)。

2. 発音と表記の同時導入における留意点

2.1 音声記号

表1における母音と子音の発音を示す音素記号には、音声学の専門知識を持たない学習者でも容易に理解できるように、国際音声記号（IPA）³⁾ の中でもローマ字に近い音素記号を使用した。

日本語の母音「う」の音素記号には、その円唇性の弱さから /u/ ではなく /ɯ/ が使われることもあるが、この音素記号は韓国語の「으」のような後舌張唇狭母音を表し、厳密には半後舌微円唇狭母音である日本語の「う」の発音とは異なる。現代日本語の5母音では、韓国語の「으」/ɯ/ と「우」/u/ のように似通った母音を円唇性で区別する必要はないので、基本母音「う」の音素記号は /ɯ/ ではなく、学習者に分かり易い /u/ とした。発音指導では、唇を丸めずに、むしろ平たい唇で /u/ と発音するよう注意を促す必要がある。

ワ行の子音（半母音）は、厳密には /u/ に対応する /w/ と /ɯ/ に対応する /ɰ/ の中間音的な二重調音の接近音であるが、表1では基本母音の /u/ に対応する /w/ で示した。指導では「う」同様、唇をあまり尖らせずに発音するよう注意する必要がある。

また、ヤ行の子音（半母音）のIPAは、硬口蓋接近音の /j/ であるが、英語のアルファベット j との混同を避け、ローマ字で使用されている前舌円唇狭母音の音素記号 /y/ で示した。発音指導では、/u/ と /w/ 同

様、唇を尖らせずに発音するよう注意する必要がある。
ラ行の子音は音声学上、歯茎弾き音 /r/ 及び、そり舌弾き音 /ɾ/ の音素記号で表記される場合もあるが、表1ではローマ字表記に即した /r/ で示した。

母語干渉により /r/ の発音がラ行の子音と著しく異なってしまう場合には、日本語のラ行の子音 /r/ は、むしろ英語の語頭の /l/ の発音に近いと説明し、英単語の land, lid, look, lend, loft などの頭子音の発音を例に示すのも一案である。

2.2 濁音

清音と濁音の対応関係を示すには、まず、表1の清音の仮名を指して発音し、ポインターを濁点の挿入枠にドラッグして対応する濁音を発音する。

英語では、無声子音 /k/, /s/, /t/ に対応する有声子音 /g/, /z/, /d/ は、全く異なるアルファベットで表記されるのに対し、日本語ではカ・サ・タ行の清音の仮名文字に濁点「[˙]」を付けて、それぞれに対応する濁音を表記する。清音の子音（無声子音）に対応する濁音の子音（有声子音）が、清音の仮名文字に濁点を付け加えるだけで簡単に表せる仮名文字の特徴は、表1を利用して体系的に示すことができる。ただし、ハ行に関しては、ハ行の清音の仮名に半濁点を付けて無声子音 /p/, 濁点を付けて対応する有声子音 /b/ を示す。このような音声学上の規則を逸するハ行の清音・濁音・半濁音の対応関係は、ハ行の子音 /h/ が本来 /p/ と発音され（P音考）⁴⁾、発音が [p] → [ɸ] → [h] と変化した歴史的音声変化に由来すると考えられる。従って、ハ行に関しては、清音の仮名文字の子音 /h/ に対応する濁音の子音 /b/ と半濁音の子音 /p/ との例外的な対応関係を指摘し、学生の注意喚起を促す必要がある。

2.3 子音の異音化

五十音図の成立は平安時代に遡り、現代日本語の音声を反映するものではないため、子音の音声体系は一般的な五十音図に示される通りではなく、より複雑である。表1で網掛けされた「し、ち、つ、ひ、ふ」の子音は異音（Allophonic Variations）である。

2.3.1 サ行とタ行の異音

サ行の「し」、タ行の「ち」の子音は口蓋化（Alveolar Fricative Palatalisation）により、歯茎摩擦音 [s]、歯茎破裂音 [t] ではなく、歯茎硬口蓋摩擦音 [ç]、歯茎硬口蓋破裂音 [tç] で発音される。対応する濁音の発音も無声子音 [ç], [tç] に対応する有声子音 [z], [dz] となる（Labrune 2012:62ff）。

また、タ行の「つ」の子音は破裂音化（Alveolar Plosive Affrication）により歯茎破裂音 [ts] となり、破裂音 [t] から破裂音 [ts] に異音化する。対応する濁音の発音も無声子音 [ts] に対応する有声子音 [dz] となる。サ行とタ行の異音化が起こる環境は以下に示す通りである。

表2 口蓋化（Alveolar Fricative Palatalisation）

異音化	環境	例
/s/ → [ç]	+ /i/ + /y/	しごと /sigoto/ → [çigoto] ‘work’ いしゃ /isya/ → [iça] ‘doctor’
/t/ → [tç]	+ /i/ + /y/	ち /ti/ → [tçi] ‘blood’ ちゃ /tya/ → [tça] ‘tea’

表3 破裂音化（Alveolar Plosive Affrication）

異音化	環境	例
/t/ → [ts]	+ /u/	つぎ /tugi/ → [tsugi] ‘next’

音声学の専門知識のない学習者を対象とする日本語の発音指導においては、異音化の詳細な説明は寧ろ省き、国際音声記号（IPA）の代わりにローマ字表記（ヘボン式）で示す方が分かり易い。

また、共通語（lingua franca）として、英単語の発音を例に挙げた説明も有効である。例えば、「し」は英語の sea に比較して she の子音の発音を例に挙げ⁵⁾、「ち」は tea に比較して chicken の語頭の子音の発音を例に挙げることができる。しかし、語頭に /ts/ がくる英単語はないので、例えば、cat の複数形 cats の語末の子音 [ts] の発音を例に挙げ、語末から語頭に移行して「つ」で始まる日本語の単語の発音練習に繋げるのも一案である。

サ行とタ行の子音の異音化は、日本語の初級文法で扱われる動詞の活用でも起きるので、注意喚起する必要がある。

2.3.2 ハ行の異音

ハ行の「ひ」の子音は口蓋化 (Glottal Fricative Palatalisation) により、声門音 [h] ではなく硬口蓋音 [ç] となり、「ふ」の子音は円唇化 (Labialisation) により、両唇音 [ɸ] となる。ハ行の異音化が起こる環境は以下の通りである。

表4 口蓋化 (Glottal Fricative Palatalisation)

異音化	環境	例
/h/ → [ç]	+ /i/ + /y/	ひと /hito/ → [çito] 'person' ひゃく /hyaku/ → [çaku] 'hundred'

表5 円唇化 (Labialisation)

異音化	環境	例
/h/ → [ɸ]	+ /u/	ふく /huku/ → [ɸuku] 'clothes'

発音指導では、英語の /h/ の音が比較的弱い音で発音される点を踏まえ、例えば、「ひと」/hito/ → [çito] 'person' が「いと」/hito/ → [ito] 'string' と発音されないように、日本語の「ひ」の子音は、ドイツ語の一人称単数主格 ich の語末の子音同様、比較的強く息を出す音である点に注意する必要がある。

前述の通り、日本語の異音は訓令式 (日本式) ではなくヘボン式ローマ字表記を用いることで、ある程度実際の発音に近い音を表すことができるが、「ふ」に使われるヘボン式ローマ字 f に関しては、ローマ字表記に起因する発音ミスに留意すべきである。指導の際は、日本語に /f/ という音素は存在しないことを説明し、広く知られている世界遺産の富士山 (Mt. Fuji) は、英語では下唇を噛む無声唇歯摩擦音 [f] で発音されるが、日本語の「ふ」の子音はローソクを吹き消す時のように唇を丸めて息を出す無声両唇摩擦音 [ɸ] である点を指摘する必要がある。

2.4 特殊モーラ

音節文字である仮名文字は原則として1文字1拍 (1mora) で発音される。モーラ (mora) という拍の感覚は、日本語母語話者には自然と備わっているが、日本語を外国語として習得しようとする学習者には備わっておらず、聞き取り及び発音が容易ではない。例えば、共通する単音を含まない「にっぽん」/nippon/ と「ふかつ」/fukkatsu/ という二つの単語を聞いた場合、拍の感覚をもたない学習者は共通点を見出さないが、日本語母

語話者は促音という共通点 (共通のモーラ) を見出す。

2.4.1 促音

表1を用いて、例えば、遺書 (いしょ) と一緒 (いっしょ) を比較する場合、まず、ポインターでア行の「い」、サ行の「し」に続けて挿入棒の小文字の「よ」を指し、2拍で「いしょ」[içɔ] と発音する。

次に、ポインターでア行の「い」に続いてタ行の隣接表記の小文字の「っ」を指しながら、もう片方の手で喉を押さえて1拍分の間 (glottal stop [ʔ]) を入れてから、サ行の「し」、挿入棒の小文字の「よ」の順に指し、3拍で「いっしょ」[iʔçɔ] と発音する。

促音の発音指導では、遺書 (いしょ) 'will' と一緒 (いっしょ) 'together' の例のように極端に意味が異なる2つの単語を比較しながら促音の有無による意味の分別を示すことで、特殊モーラの正確な発音の重要性を強調し、学習者の注意喚起に繋げることが有効である。表1を使えば、1拍分の間 (glottal stop [ʔ]) に相当する小文字の「っ」をポインターで指すか否かで、促音の有無が可視化できるので、注意喚起しながら発音指導することができる。

2.4.2 撥音

表1の撥音「ん」は、ナ行の子音の音素記号 /n/ と区別し、学生にも分かり易いと思われる口蓋垂鼻音の音素記号 /N/ ⁶⁾ で示した。

しかし、語中の撥音「ん」は、後続の子音の調音点と同一の鼻音で発音され、後続する音によって [m] [n] [ŋ] と同音化 (Syllabic Nasal Assimilation) する。撥音の異音化が起こる環境は以下に示す通りである。

表6 撥音の同音化 (Syllabic Nasal Assimilation)

異音化	環境	例
/N/ → [m]	+ /p/ /b/ /m/	しんぱい /siNpai/ → [çimpai] 'worry' はんぱい /haNbai/ → [hambai] 'sell' さんま /saNma/ → [samma] 'saurý'
/N/ → [n]	+ /t/ /d/ /n/ /s/ /z/	ぜんと /zeNto/ → [zento] 'outlook' ほんど /hoNdo/ → [hondo] 'mainland' おんな /oNna/ → [onna] 'woman' けんさ /keNsa/ → [kensa] 'inspection' はんざい /haNzai/ → [hanzai] 'crime'
/N/ → [ŋ]	+ /k/ /g/	きんこ /kiNko/ → [kiŋko] 'safe' さんご /saNgo/ → [saŋgo] 'coral'

例えば、「はんぶん」という単語を [hambuN] と発音しながら、ローマ字表記の慣習に従って hanbun と板書した場合、hambun か hanbun かという質問を受ける可能性がある。「はんぶん」に含まれる2つの「ん」の音は異なり、語中の「ん」は両唇音の鼻音 [m] で発音され、語末の「ん」は口蓋垂音の鼻音 [N] で発音される。日本語母語話者は撥音の異音 [m] [n] [ŋ] を同一音と認識するため、発音指導及びローマ字表記の際、特に注意する必要がある。

2.4.3 長音

表音文字は発音と文字が一致するのが原則であるが例外もある。例えば、[ei], [ou] という連続母音は、[e:], [o:] と長音化する。ア行のひらがな及びカタカナの「ー」（縦書きでは「丨」）で表す長音は、[a:] [i:] [u:] [e:] [o:] の後半部分に相当し、直前の母音を1拍（1 mora）分引き伸ばして発音する特殊モーラである。表1では、長音を示すため、ア行に「い」と「う」を隣接表記し、対応する音素記号の /e/ と /o/ と同色で示した。

表1を使用して、例えば「先生」（せんせい）[sense:] という単語を導入するには、ポインターで「せ・ん・せ」の順に指しながら発音し、最後は赤く色分けされた隣接表記の「い」を指して、ポインターを同色の /e/ にドラッグしながら [e:] と発音することで、[ei] から [e:] への音声変化を示し、単語の仮名表記と発音の相違点を示すことができる。同様に、「おはよう」[ohayo:] は、ポインターで「お・は・よ」の順に指しながら発音し、最後の「う」は青く色分けされた隣接表記の「う」を指し、ポインターを同色の /o/ にドラッグして [o:] と発音することで、[ou] から [o:] への音声変化を示す。

2.5 母音の無声化

英語と日本語では音の単位が異なり、Is it *desu* or *des*? という学生の質問は、仮名表記で相違点を示すことができない。

例えば、aki（あき）と asu（あす）を比較した場合、日本語母語話者は「き」と「す」という仮名1文字分（1拍）の違いとして1単位の音（1mora）を聞き分け

るのに対し、英語母語話者は /k/ と /s/ の子音と /i/ と /u/ の母音の違い、つまり1単位ではなく2単位の音素を聞き分ける。

「です」の語末の /u/ が発音されるか否かを問う上記の質問は、日本語の標準語（東京方言）における狭舌母音の無声化を指摘したものであり、母音の無声化は、日本語母語話者が無意識な反面、学習者は寧ろ敏感に聞き取る点に留意する必要がある。

3. 外来語の発音と表記

日本語は CV Language⁷⁾ と称されるように、開音節言語としての性格が強く、特殊モーラ（mora）を除けば、母音で終わる。このような日本語の音声体系の特徴が外来語の発音と表記に如何に反映されるかは、以下に示す通りである。

英語	ローマ字読み	母音差	仮名表記
Christmas	/Kurisumasu/	+3	クリスマス

上記の外来語のローマ字読みは、日本語が CV Language と称される所以を端的に示している。「クリスマス」の原語には、母音が2つしかないのに対し、ローマ字読みでは子音+母音（CV）形式で5つ（+3）となる。

同様に、留学生の名前や国名の発音やスペリングも原語とは著しく異なる場合が多く、原語の発音とは掛け離れた日本式の発音や原語のスペリングとローマ字表記との相違に戸惑いも見られる。

指導では、外国語は日本語の音声体系に即して発音され、日本語化された発音（ローマ字読み）に基づいたカタカナ表記となる点を解説する必要がある。

日本語の子音の異音化と CV 構造による母音差が、外来語の発音に如何に影響を及ぼすかは、カタカナ言葉と原語の発音の比較により、以下の通り示すことができる（太字は異音、（ ）内は母音数を示す）。

英語	ローマ字読み	母音差	仮名表記
scene (1)	/ci:N/ (1)	0	シーン
team (1)	/tɛ:mu/ (2)	+1	チーム
fax (1)	/ɸakkusu/ (3)	+2	ファックス
tourist (2)	/tsu:risuto/ (4)	+2	ツーリスト

カタカナ表記される語彙の指導では、表7のカタカナ表を用い、子音（Consonant）＋母音（Vowel）を単位とする日本語の音声体系の特徴と子音の異音化を可視化することで、CV構造に則した外来語の日本式発音（ローマ字読み）とカタカナ表記を同時に導入することができる。

カタカナ												
/v/	/N/	/w/	/r/	/y/	/m/	/h/	/n/	/t/	/s/	/k/		
ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ		タ	サ	カ	ィ	ア /a/
		リ	ミ	ヒ	ニ			チ	シ	キ	イ	イ /i/
ヴ		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	ウ	u/ /u/
		レ	メ	ヘ	ネ			テ	セ	ケ	エ	エ /e/
		ヲ*	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	ォ	オ /o/
					ッ						ー	/:/
					/p/ /b/			/d/ /z/ /g/				

表7 カタカナ表（付録2拡大図参照）

例えば、「ツーリスト」は「ツ」の後に「ー」を指して長音を示し、「リ・ス・ト」と続けて5拍で発音する。「ファックス」は「フ」の後にア行に隣接表記された小文字の「ァ」を指して「ファ」と一拍で発音し、次に、タ行に隣接表記された小文字の「ッ」を指して、もう片方の手で喉を絞めながら促音を示し、「ク・ス」と続けて4拍で発音する。

現行の日本語教育で使用している日本語教材には、「外来語の表記のしかた」として以下の記述がある。

__cc__のように子音が並んでいるときは、子音の後に適当な母音を添えて発音したり、表記したりする。

1) t,dには母音oを添える。

t and d are followed by o.

hint→hinto ヒント

2) c,b,f,g,k,l,m,p,sには母音uを添える。

c,b,f,g,k,l,m,p and s are followed by u.

mask→masuku マスク

（「日本語かな入門（英語版）」p.65一部省略）

上記の説明では、なぜ、/t/、/d/には母音/o/を添え、その他の子音には母音/u/を添えるのかが不可解である。しかし、外来語の発音と表記の説明においても、仮名表（表7）を用いて学習者に日本語の子音の異音化を可視化することで、以下のように説明することが

可能となる。

子音が並んでいる環境CCでは、原則として、母音/u/を付加する。但し、/t/、/d/の場合は、/o/を付加する。

子音/t/、/d/に母音/u/が続くと、異音化によって/tu/、/du/が/tsu/、/dzu/となり、例えば、ボトル (bottle) がボツル (??)、キャンドル (candle) がキャンズル (??)、キャット (cat) がキャッツ (cats)、フレンド (friend) がフレンズ (friends) となり、語末では単数と複数の区別がつかなくなる。従って、連続する子音が/t/または/d/の場合は、/u/の代わりに、音響 (acoustics) が/u/に最も近い/o/を付加することで異音化を避ける。

なぜ、/t/、/d/には/u/ではなく/o/を添えるのかが不可解で、子音に付加する母音/u/と/o/の混乱が見られる学習者には、/t/、/d/には例外的に/o/を付加する根拠として、異音化を示した方が理解し易いようである。

「母音」または「子音＋母音」で発音される日本語の基本的な音声体系と異音や特殊モーラの特徴を理解することにより、学習者は日本での自分自身の名前（または呼び名）を正しく発音し、表記できるようになる。また、カタカナ言葉として丸暗記するのではなく、日本語の音声体系と仮名表記の関係性を理解することで応用範囲が広がり、語彙リストや辞書には記載のない友人や家族の名前、出身地、自国の名所なども日本語らしく発音し、表記してみようという学習者の主体的な試みも見られる。

このような学習者のモチベーションの高まりは、日本語の音声体系の可視化による発音と表記の同時学習法に、学習者のニーズや願望に基づく目的達成に役立つという道具的価値 (Instrumental Value) が認められることを示唆し、学習者の能動的な学習を促す効果が期待できる。

4. おわりに

一般の50音図の不完全性を補って、（半）濁音や拗音などを個別の仮名表で示すのではなく、日本語の音声体系を総括的に俯瞰する仮名表の開発により、清音と（半）濁音の相対関係や拗音の小文字の「ゃ・ゅ・ょ」がイ段にのみ付加される点などを図示化し、異音や特

殊モーラなどを可視化することで、学習者が犯しがちな清音と濁音の混同、ヤ行の小文字の誤用、特殊拍の挿入/欠落による発音ミスや誤表記を予防/矯正することができる。

しかし、仮名表に多くの情報を網羅することで、却って、学習者を混乱させる懸念もあり、日本語の発音と表記の同時導入では、本稿で挙げた留意点を踏まえた適切な指導が必要である。

本稿が提案する日本語の音声体系の可視化による発音と表記の同時導入の学習効果については、今後の継続したデータ収集による検証の必要があるが、本学高度教養教育・学生支援機構「外国人留学生等特別課程」の「日本語会話入門1」(Japanese Communication 1)⁸⁾コースにおける実践において、学習者のモチベーションの高まりが認められた点は特筆すべきである。

1990年代以降、日本語の教科書は「ローマ字表記」から「かな表記」に転換され、初級教材における語彙数の増量や文化の導入等の変化がみられ(大須賀2011)、外来語の増加傾向が続いている現状を踏まえれば、日本語初学者への仮名導入を奨励し、日本語の音声体系の総括的な理解を促すような指導法の工夫が、学習者の生涯的な日本語の自律学習に繋がると確信している。

謝辞

本稿が提案する日本語の音声体系の可視化の試みの動機付けとなったのは、2014年2月にロンドンで開催されたヨーロッパ日本語教師会・国際交流基金ロンドン支部共催セミナー/ワークショップにおける川口義一教授(早稲田大学大学院日本語教育研究科)の実演であり、このワークショップへの参加が本稿で示した仮名表(表1, 7)開発に繋がった。

また、同年8月にロンドン大学(UCL)で開催された英語音声学サマーコース(Summer Course in English Phonetics and English Pronunciation: a Contemporary Approach)における高橋豊美教授(東洋大学)による発表「Japanese Phonetics and Phonology」では、子音の異音化環境を分かり易くご教示いただき、大変参考になった。

記して感謝申し上げます。

注

- 1) 本稿で提案する発音と表記の同時導入の実践においては、カラー版の仮名表の使用を前提としているが、本稿が白黒印刷である点を考慮し、便宜上、表1の注釈(*1, 2, 3)と対応表により色分けを示す。
- 2) 日本語母語話者が日本語の音を数える単位であり、一定の時間的長さをもった音韻論上の分節単位を示す。
- 3) International Phonetic Alphabetの略称
- 4) 上田万年の音韻史研究論文であり、日本語のハ行の頭子音がかつては両唇破裂音の無声子音/p/であったことを論じた。1898年に「語学創見」と題して『帝国文学』4-1, pp41-46に発表された。
- 5) 厳密にはsheの子音は後部歯茎摩擦音[ʃ]であり、日本語の「し」の発音とは異なるが、英語には歯茎硬口蓋摩擦音[tʃ]の発音がないので、発音上、最も近い例を挙げた。指導では、英語のsheの子音ほど唇を尖らせず、平らな唇で[ʃ]と発音するように注意する必要がある。
- 6) 文末などでは口蓋垂音の鼻音[N]で発音され、母音の前では鼻母音となる。
- 7) [子音(Consonant)+母音(Vowel)]を音の基礎的単位とする日本語の特徴を示す。
- 8) 2014年4月の本学経済学部研究科「高度グローバル人材コース(GPEM)」開設に伴い、同年秋に開設されたGPEM生を優先的に受け入れる初級前期レベルの日本語科目であり、秋学期のみの半期開講コース。

参考文献・発表

文献

- 1) 上田万年(1898)「語学創見」『帝国文学』4-1
- 2) 大須賀茂(2011)「CBIと日本語教育の教材についての一考察：日本語学習者の意識調査から」Examining Japanese Teaching Materials Utilizing The CBI Perspective: From the Japanese Language Survey of the Next Generation Curriculum, Seton Hall University https://www.princeton.edu/pjpf/past/18th-pjpf/02_Osuka-Princeton-2011.pdf (accessed 2016.01.09)

- 3) 梶屋和明 (1996) 「日本語教育指導におけるひらがな指導のあり方」教育研究シリーズ42, 広島県立教育センター出版
- 4) 国際交流基金日本語国際センター (1995) 「日本語かな入門 (英語版)」 *An Introduction to the Japanese Syllabary* 凡人社
- 5) Labrune, L. (2012) *The Phonology of Japanese*. Oxford: Oxford University Press
- 6) Okada, H. (1999) 'A guide to the usage of the International Phonetic Alphabet' 117-119 *Handbook of the International Phonetic Association*, Cambridge: Cambridge University Press

発表

- 7) 川口義一 (2014) ヨーロッパ日本語教師会・国際交流基金ロンドン支部共催 J-GAP & Japan Foundation, London Lecture & Workshop における日本語導入法の実演 (2014年2月国際交流基金ロンドン支部)
- 8) 高橋豊美 (2014) ロンドン大学UCL主催 Summer Course in English Phonetics and English Pronunciation: a Contemporary Approach における発表 'Japanese Phonetics and Phonology' (2014年8月UCL, ロンドン大学)

付録1. ひらがな表

ひらがな													
/m/n/ŋ/	/N/	/w/*3	/r/	/y/	/m/	/h/	/n/	/l/	/s/	/k/			
	ん	わ	ら	や	まは*	は	な	た	さ	か	あ	/a/	
やゆよ	り		み		ひ	に	ち	し	き	い*1	い	/i/	
	る	ゆ	む		ふ	ぬ	っ	す	く	う*2	う	/u/	
	れ		め	へ*1	へ	ね	て	せ	け		え	/e/*1	
	を*2	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ		お	/o/*2	
		</											

付録2. カタカナ表

カタカナ														
<div>/m/n/η/</div>														
/v/	/N/	/w/	/r/	/y/	/m/	/h/	/n/	/t/	/s/	/k/				
ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ		タ	サ	カ	ア	ア	/a/	